慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『東山殿御詠』の基礎的研究：十市遠忠の事績に及ぶ：附、翻刻・初句索引
Sub Title	A study on "Higashiyama-dono gyoei" : with an excursus on Tōchi Tōtada's achievements : appendix : transcription and first line index
Author	川上, 一(Kawakami, Hajime)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2023
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.57 (2022.) ,p.435- 475
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20220000-0435

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『東山殿御詠』の基礎的研究

―十市遠忠の事績に及ぶ　附、翻刻・初句索引―

川上　一

はじめに

室町幕府八代将軍足利義政（一四三六～一四九〇）は、文化面の治績に名高い。その趣味は多岐にわたるが、平安以来の伝統文芸である和歌についても事績多く、詠作期間は四十年、現存歌は一五〇〇首に及ぶ。だがこうした和歌資料の多くは、いまだ未紹介・未翻刻の状態にあり、歌風の検討を行うには課題が残る。稿者はさきに、義政詠の核となる三つの家集のうち二種、(1)慈照院殿義政公御集（部類本）、(2)源義政集（定数歌集成）の基礎面につき見解を述べた[1]。本稿では残る(3)東山殿御詠（歌会詠集成）を取り上げ、その基礎的側面の整理を行うことにしたい。

東山殿御詠は、前田育徳会尊経閣文庫（以下、尊経閣文庫）蔵本のみが知られる孤本で[2]、長禄～文正年間の約五十箇度に及ぶ歌会詠の抄出である。応仁・文明の乱前における幕府歌壇の実態を伝える資料は限られており、貴重な写本であることに疑いないが、これまでに専門的言及なく、校訂テキストも提供されてこなかった。

また東山殿御詠の書写・伝来については、大和国の国衆十市遠忠（一四九七～一五四五）の関与が指摘される。遠忠は本姓中原。当代随一の和歌好尚でしられ、これまでも主に和歌研究

の分野で注目されている。[3]だが、彼の生涯（特に武将としての動向）や交遊関係については依然不明な点が多く、長く更新をみていない。本書に収める紙背文書には、こうした遠忠の動向を把握するに有効な資料が散見される。このため、紙背文書についても紹介を兼ねて検討し、十市遠忠の事績につき若干の新見を提供することにしたい。

一、『東山殿御詠』概要

東山殿御詠は、井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 室町前期』[4]が言及して以降、基本的に義政の家集として認知されている。但し、すでに指摘もあるように、全二五四首のうち百首以上が飛鳥井雅親（一四一七～一四九〇）他の詠であり、このため『私家集大成』では「純粋な家集ではない」[5]として翻刻収録に至らず、現在まで研究利用に供されてこなかった。

ただこれら他人の詠は、編纂時に生じた混入の類ではなく、詠者を明示した上での意図的な抄出である。書写者とみられる十市遠忠も義政の直後の時代を生きた人であり、内容自体の信頼性は極めて高い。改めて収録歌を整理し、詳しい検討を行う。

(1)書誌

『東山殿御詠』〔前田育徳会尊経閣文庫蔵：一二・二七・書〕〔享禄頃〕十市遠忠写。横本一冊。表紙は紺色無地（一三・六×一八・一糎）。近代以降に補われた保護表紙と思しく、もとは本文共紙の冊子本とみえる。一丁表（もとの表紙）左肩に本文同筆で「東山殿御詠」と墨書（本来の外題であろう）、右肩に本文別筆で「東山和哥集」と朱書。内題「御詠 慈照院殿」。料紙は斐紙。墨付二二丁（共紙表紙の第一丁を含む）、遊紙後二丁。全二五四首。表紙を除く全丁に紙背文書あり（十市遠忠宛書状、遠忠書状土代）。毎半葉十四行、和歌一首二行書。字高約一二・〇糎。興福寺明王院旧蔵書の一。

(2)収録内容

足利義政の歌会詠を中心とした歌書で、以下の興行五十一箇度を順不同に抄出する（「　」は先頭の歌題、（　）は歌番号、年次不明の興行には別途白抜き数字を付した）。

＊　＊　＊

①寛正五年正月十三日室町殿歌会「椿葉契久」（1）

②寛正四年四月十三日室町殿歌会「首夏藤」（2～4）
③寛正六年十月二十七日室町殿歌会「野霜」（5～7）
④寛正三年六月十三日室町殿歌会「夏天象」（8～10）
⑤寛正二年十一月二十七日室町殿歌会「山冬月」（11～16）
⑥寛正四年六月十三日室町殿歌会「行路夕顔」（17～22）
⑦寛正六年九月十四日室町殿歌会「擣衣到暁」（23～28）
⑧寛正四年二月十三日室町殿歌会「尋花」（29～34）
⑨寛正四年十二月十三日室町殿歌会「桧原雪」（35～40）
⑩年次不明❶「鶯是万春友」（41）
⑪寛正六年十二月十三日室町殿歌会「雪似白雲」（42～47）
⑫年次不明❷「迎春祝言」（48～49）
⑬文正元年七月二十六日室町殿歌会「七夕糸」（50～52、57～59）
⑭年次不明❸「夏天象」（53～55）
⑮年次不明❹「椿葉契久」（56）
⑯長禄四年正月二十五日室町殿歌会「松色春久」（60～61）
⑰年次不明❺「鶴有遐齢」（62）
⑱寛正三年十一月十三日室町殿歌会「石間氷」（63～68）
⑲寛正六年六月二十三日室町殿歌会「夕立風」（69～74）
⑳長禄四年六月二十六日室町殿歌会「蓮露」（75～80）
㉑長禄四年八月二十五日室町殿歌会「秋色」（81～86）
㉒寛正五年十月十三日室町殿歌会「嵐吹寒草」（87～92）
㉓長禄四年七月二十九日室町殿歌会「早涼知秋」（93～98）
㉔寛正二年五月二十八室町殿歌会「郭公」（99～104）
㉕寛正五年三月二十六日室町殿歌会「花下送日」（105～110）
㉖長禄四年三月十五日室町殿歌会「惜花」（111～116）
㉗寛正二年八月二十九日室町殿歌会「月前風」（117～122）
㉘寛正五年六月十三日室町殿歌会「名所氷室」（123～128）
㉙長禄四年十一月十三日室町殿歌会「水鳥」（129～134）
㉚寛正二年正月十三日室町殿歌会「寄国祝」（135～136）
㉛寛正五年二月三十日室町殿歌会「早蕨」（137～142）
㉜長禄四年二月十六日室町殿歌会「隣家梅」（143～148）
㉝寛正四年正月十三日室町殿歌会「庭梅久盛」（149～150）
㉞寛正二年六月十三日室町殿歌会「蝉」（151～156）
㉟寛正五年十二月二十三日室町殿歌会「夜雪」（157～162）
㊱寛正五年九月二十七日室町殿歌会「河月」（163～168）
㊲寛正五年五月二十八日室町殿歌会「夕橘」（169～174）
㊳寛正三年十二月十三日室町殿歌会「月照網代」（175～180）
㊴文正元年三月三十日室町殿歌会「谷残花」（181～186）

㊵寛正六年五月十三日室町殿歌会「瞿麦」（187～192）
㊶寛正二年十二月十三日室町殿歌会「冬煙」（193～198）
㊷長禄四年十月二十六日室町殿歌会「竹不改色」（199～200）
㊸寛正三年八月十三日室町殿歌会「鹿声何方」（201～206）
㊹長禄四年二月（四月カ）十九日室町殿歌会「卯花初開」（207～212）
＊歌題より推測
㊺寛正三年二月十三日室町殿歌会「浜余寒」（213～218）
㊻寛正六年四月十三日室町殿歌会「未忘春花」（219～224）
㊼寛正二年四月十三日室町殿歌会「更衣惜春」（225～230）
㊽年次不明❻「池半凍」（231～233）
㊾年次不明❼「衾」（234～239）
㊿年次不明❽「山霞」（240～245）
(51)年次不明❾「嶺雪」（246～254）

＊　＊　＊

これらを編年に並べ替え、項目若干を付したものが［別表］である（本稿末尾）。これをもとに次項で内容を検討したい。

二、収録歌について

(1)全体の構成

東山殿御詠は、長禄四年（一四六〇）正月（⑯）から文正元年（一四六六）七月（⑬）までの歌会詠の抄出である。内題に「御詠慈照院殿」とあり、各興行、はじめに歌題・日時が記され、ついで義政詠（無記名）、大半の興行に同題の飛鳥井雅親詠（「雅親」と記名）が続く。例として⑤の興行を示す。

山冬月　狩場雪　寄舟恋　寛正二十一廿七

11さやけさは秋にまさきもちりはてゝ
　と山の月のかけそさひしき
12たつ水の行ゑも見えすふる雪に
　あはせかねたる野へのたか人
13ねをそなく人にこゝろをおきつとり
　鴨といふふねよそにこかれて
14にほのうみの浪ちこほりていてぬらし
　みやこにさゆるやまのはの月　雅親
15ふる雪に道たと〳〵しかへるさの
　つきまつはかりかりやくらさむ
16さはるしもえにやあるらん身をうらに
　あし分をふねこきかへりつゝ

11～13がそれぞれ「山冬月・狩場雪・寄舟恋」題の義政詠、14～16が同題による雅親詠である。各興行、こうした簡易な書写形式で抄出される（以下、このまとまりを「歌群」と呼ぶ）。

収録の興行を検討したい。本文中、興行に関する具体的な言及はないものの、複数の徴証により、多くが義政自邸（＝室町殿）での月次歌会と判断できる。まず、義政・雅親が同題を詠じているため、これらは通題（参加者全員が同じ歌題を詠む）の興行である。出題についても、正月が一題、他の月が三題で統一されており（［別表］参照）、こうした特徴は同時期に開催された幕府月次歌会の形式と一致する。すなわち国立公文書館に蔵される室町殿月次和歌（二〇一・〇一三六）は、長禄二年の月次歌会四箇度（正・二・五・十一月）を収めるが[6]、正月の会が「梅万春友」の一首、他は各三首の通題である。また、開催の月が重複しない点も[7]、これらが月次歌会であることの証左となる。

義政は長禄二年、自身の任槐と前後して、月次歌会の構成を刷新したが[8]、その実態を伝える資料はこれまで、前述の「室町殿月次和歌」に限られていた。本書によって、その催行が具体的に把握できることになる。

(2)年次未詳歌群について

本書には、年次未詳の歌群が九種認められる（⑩⑫⑭⑮⑰㊽㊾㊿51＝❶～❾）。このうち❶～❻は、前後の月次会詠と要素的に大差なく、同種の興行とみてよい[9]。他方歌群❼～❾は、他の収録歌群とは些か異なる特徴を示している。順に検討する。

まず歌群❼は、「234衾」以下、六首の題詠で構成される。注意されるのはこのうち四首が、義政後年の定数歌詠と一致する点である[10]。

234衾　↓文明二年一字題百首49
235桜　↓文明二年一字題百首6
236沢若菜↓文明十七年百首5
237関月　↓文明四年百首47

歌群❼が歌会での出詠歌であれば、義政による自詠の流用（使い回し）の実態を示す好例となるが、即断はできない[11]。今のところ東山殿御詠の他歌書との重出は、歌群❼のほか皆無であり[12]、❼のみ重出率が不自然に高い。これはむしろ定数歌からの抄出を疑うべきかもしれない。

次に歌群❽は、最初の題下に「左之三首御懐紙由、李阿申候

了」との注記があり、義政詠三首（240～242、山霞・待花・祝言）のあとに上様（かみさま）、すなわち御台日野富子（一四四〇～一四九六）の詠がつづく（243～245、題同じ）。「李阿」については後述するが、要するに、本歌群が三首懐紙（通題）の歌会詠であることを指摘していると思しい。注目すべきはやはり、富子の詠がみえている点であろう。富子の和歌事績は応仁・文明の乱以後、公武の歌会で確認されるようになるが、歌群❽は他の収録内容からみて乱前のものと思しい。[13] 事績・実作ともに最古のものとなろう。

歌群❾は、義政（四首）、大裏上臈（内）（三条冬子、一首）、藤大納言殿（日野勝光、一首）、雅親詠（三首）の抄出である。各々別の題を詠む続歌形式で、内裏上臈の冬子が出詠している点からみて禁裏主催の会であろう。冬子は三条実量女。後花園天皇（一四一九～一四七〇）の上臈として入内するも在任中の事績は殆ど知られず、むしろ天皇没後、「旧院上臈」としての活動が著名である。[14] 歌群❾所収の冬子詠は、その在任期における事績として貴重であるが、同時にこれが天皇が譲位した寛正五年（一四六四）七月以前の興行であることを示すものでもある。

以上が年次未詳歌群の概要となる。特に歌群❽❾については、興行の詳細は不明ながら、室町期の女性歌人の事績に新見を与える点で注目される。関連資料の出現を俟ちたい。

(3)小括

以上、東山殿御詠の収録歌を歌人別に集計すると次のようになる。

足利義政（無記名）一三九首　＊二首重出／飛鳥井雅親（雅親）一一〇首／日野富子（上様）三首／三条冬子（大裏上臈）一首／日野勝光（藤大納言殿）一首

収録状況をみる限り、本書の編者と目されるのは、集中唯一実名で表記されている飛鳥井雅親その人である。雅親は義政の歌道師範であり、当時その詠作を添削・管理する立場にあった。本書の簡略な書写形式からみても、その原態（祖本）は、月次歌会での義政詠・自詠を留めた、雅親自身の手控えであろう。興行の年次から推すに、文正元年（一四六六）頃、応仁・文明の乱前には原型が成っていたとみてよい。

東山殿御詠の収録歌は、ほぼすべてが、本書によってのみ知られる独自歌である。もとより抄出であり、歌会の全貌は伝えないが、資料の乏しい長禄・寛正年間の和歌史にあって、その意義は極めて大きい。

三、東山殿御詠の伝来：李阿について

ついで本書の伝来について検討したい。東山殿御詠は、尊経閣文庫に複数蔵される十市遠忠関係典籍資料の一で、もと興福寺明王院の旧蔵書である。遠忠手択の典籍類はその没後、息遠勝、さらに遠勝後室の手を経て明王院に献納されたらしく、[15]うち数点が天和年間、前田綱紀家臣の書物奉行津田光吉によって購われ、同文庫に収蔵されるに至る。

このうち東山殿御詠は、紙背文書から遠忠の関与は確実視されたものの、書誌事項に明王院旧蔵を示す明徴なく（多くは「明王院蔵書七十冊之内」という貼り紙がある）、長らく検討が及ばなかったものである。だが近年、武井和人氏が、明王院の蔵書内容を記した天和二年（一六八二）十二月七日津田太郎兵衛（光吉）筆興福寺之内明王院書籍之覚（『松雲公採集遺編類纂』[16]九二・書籍部五「南都東大寺等書籍目録」所載）を調査し、その中に本書が「一東山殿御詠　遠忠筆之由」として見えることを指摘した。[17]東山殿御詠が、まさしく明王院旧蔵の遠忠書写本であったことが今では明らかとなっている。[18]

ここで問題としたいのは、東山殿御詠（の親本）がいかなる経緯をもって遠忠のもとに帰したのか、という点である。先に言及したように、本書は義政の歌道師範雅親による手控えに端を発したものと思しく、後代特別流布した歌書というわけではない。室町殿周辺の歌書が大和の国衆十市氏の手にわたるには、何か独自の経路が存在したとみるべきである。

この時、手掛かりとなるのが、先述歌群❽の注記「左之三首御懐紙由、李阿申候了」にて言及されていた「李阿」の存在である。本文中唯一、書写者側の人物として名がみえており、その伝来への関与が疑われる。

李阿は享禄年間、遠忠編の自歌合複数で作者としてみえる歌僧で、[19]この時期遠忠のもとに身を寄せていたものと思われるが、その事績については、ながらく未詳とされている。現状の到達点としては、『中世歌合集と研究（続）』所収「五十番歌合（資直判）」の研究篇における解説が要を得ているので以下に引用する。[20]

李阿の伝は不明で、享禄三年に遠忠は自詠と、淡州における李阿の詠とを番えて五十番歌合を作り、資直の判を受けているが（尊経閣蔵、什上五四）、淡州にいたというから、かつて細川氏か三好氏に仕えた時衆であろうか。遠忠の詠

草によると、遠忠は反細川高国方であったらしいので、三好氏か、三好一派の担ぐ細川晴元方に仕えた者で、何らかの縁で、同じ側の十市氏の許に来たのであろうか。

すなわち、享禄三年（一五三〇）春の五十番歌合[21]（遠忠・李阿詠を左右に番えた自歌合）の奥書にある「左大永六二月大神宮法楽、……、右者於淡州詠、」という記述をもとに、三好氏ないし細川晴元方に仕えた時衆と推定するものである。以後これに対する新見が提示された形跡はなく、最新の研究においても同説は基本的に踏襲されている。

しかし、同時代の記録によれば、李阿は幕府十代将軍足利義稙（初名義材、のち義尹、一四六六～一五二三）の同朋衆であったことがわかる。義稙が将軍に復帰した永正五年（一五〇八）以降、その「御使」として、しばしば公家の記録に登場する。

早朝自室町殿（足利義稙）有御使、〈李阿〉、相公（三条西公条）対面、昨日参入之事、被喜仰之事也、（実隆公記永正六年三月二十四日条）

自室町殿被下御使、〈李阿〉、被賀中納言（三条西公条）昇進事、対面畏申了、（同永正八年十月八日条）

また、後法成寺関白記永正十三年五月十三日条に「従大樹（足利義稙）以梨阿弥十合十荷被送之」とみえる「梨•阿弥」も李阿のことだろう。この他、永正十二年十二月二日、義稙の三条御所移徙に際しても、御供として供奉しており（益田家文書・二六四「三条御所移徙次第」）、名実ともに、有力な近習であったことが把握される。

このような事績を踏まえれば、李阿が一時「淡州」に寓していた理由も自ずと明らかであろう。永正十八年三月、義稙は管領細川高国（一四八四～一五三一）との不和から京都を出奔、淡路に下向する。李阿もまた主君に随って淡路に下ったのである。先学も指摘するように、この時期の遠忠は義稙方と気脈を通じていたとみられ、東山殿御詠の紙背においてもその痕跡が散見される（後述）。享禄年間における李阿の大和寄寓は、こうした遠忠のツテを頼ったものとみてよい。

そして、日常的に将軍に近侍する同朋衆という立場であれば、東山殿御詠のごとき将軍周辺の歌書資料を手にする機会は多くあったに違いない。事実、李阿は享禄二年（一五二九）十一月、足利義尚自筆の常徳院殿御詠草（尊経閣文庫：一二九・古）[22]を遠忠に与えており、これに類する典籍を少なからず所有していたとみられる。東山殿御詠の親本についても、おそらくは李阿が在洛時に入手し、遠忠に提供したものではないか。とすれば、

遠忠が本書を書写した時期も、李阿との交流が認められる享禄年間（一五二八～一五三一）とみて、大きく外れることはないだろう。

四、紙背文書について

東山殿御詠には、後補の保護表紙を除く全丁に、遠忠に関わる紙背文書が存在している。この点については先行研究にも指摘あり、本書を遠忠関係典籍と断ずるうえで有力な根拠とされてきた。しかしここまで、その内容に検討が及んだことはないため、後考を期して整理と紹介を行うことにしたい。

本書所収の紙背文書は、すべて斐紙を用いた切紙の書状で、計二十四通からなる（いずれも一紙で一通）。本書は袋綴じであるため、判読にかなりの困難を伴うが、ひとまず日付・宛所等の情報をもとに、これらを一覧すると［表1］のようになる。書状のため年記がなく、また化粧断ちによって情報を欠いているものも少なくないが、ほぼすべて遠忠宛書状、遠忠書状土代（草稿）のいずれかであることが把握される。大永～享禄年間の書状とみてよい。[24] 当代の要人に関わるものが多く、反古とし

［表1］東山殿御詠紙背文書目録

番	丁数		文書名	日付	宛所
1	1	1	某書状	—	—
2	2	2	〔狛〕頼書状	7月13日	—
3	3	3	十市遠忠書状土代	5月6日	遊佐河内守殿（順盛）
4	4	4	真慶書状	9月18日	十市兵部少輔殿
5	5	5	某書状	—	—
6	6	6	進藤貞治書状	2月28日	—
7	7	7	十市遠忠書状土代	—	—
8	8	8	〔狛〕頼書状	3月16日	—
9	9	9	衍清書状	9月13日	十市兵部少輔殿
10	10	10	下間頼秀書状	10月14日	—
11	11	11	畠山順光書状	6月28日	十市兵部少輔殿
12	12	12	某書状	—	—
13	13	13	某書状	—	—
14	14	14	遊佐尭家書状	8月晦日	—
15	15	15	十市遠忠書状土代	12月14日	—
16	16	16	十市遠忠書状土代	9月28日	木澤下野入道殿・小柳七郎左衛門殿
17	17	17	十市遠忠書状土代	12月14日	—
18	18	18	十市遠忠書状土代	3月5日	狛修理亮殿・進藤新介殿（貞治）
19	19	19	某書状	—	—
20	20	20	下間頼玄書状	5月2日	—
21	21	21	遊佐長清書状	2月1日	十市兵部少輔殿
22	22	22	某書状	—	—
23	遊1	23	斎藤時基書状	10月21日	—
24	遊2	24	「賢」「信」連署書状	7月12日	—

て破棄されるような内容であるにしろ、史料的価値は極めて高い。

このうち注意すべき内容をもつものを数点紹介したい。まず年次が把握できるものとして、次の遠忠書状土代がある。[25]

［16］十市遠忠書状土代（16丁紙背）

公方様（足利義稙）　御帰洛儀為被仰調、至淡州　御渡海尤目出度畏存候、仍御太刀一腰令進上候、表御音信儀』計候、可然様可預御披露候、恐々謹言、

九月廿八日（大永元年）　遠忠　（花押）

木沢下野入道殿

小柳七郎左衛門殿　』

この書状は紙面全体に大きく斜線が引かれており、執筆後まもなく破棄されたものらしい。内容は、公方様（足利義稙）の上洛を扶持するため、受取人が淡路まで渡海したことに対し、祝意を示し、太刀を献上する、というものである。淡路へ下った義稙が、高国から京都を奪還すべく和泉国堺に進攻するのは、大永元年（一五二一）十月のことであるから（結局失敗に終わる）、書状の年次はこの年に定められる。宛所の木沢下野入道と小柳七郎左衛門は特定できないが、名字からみてともに畠山総州家（義就流）の奉行人であり、[26]この書状は、総州家当主畠山義英に意を通じたものとなる。

義稙は元来、畠山尾州家（政長流、当時の当主は尚順）と近く、総州家の義英とは長く敵対関係にあった。だが義稙の再挙に際し両畠山氏は和睦（但し尚順の息稙長が高国方につく）、義英も義稙の支援者となる（祐維記抄十月二十六日条）。遠忠書状土代は、この動きを早々に察知し、義英側への接近を試みたものと思われる。もっとも義英が淡路へ渡海した形跡はなく（淡路入りしたのは尚順）、なんらかの事実誤認があったと思しい。書状が破棄されたのもこの点が関係しよう。

さてこの遠忠書状土代の存在は、遠忠本人の事績を考える上でも重大である。「大永元年」という年次は、確認しうる遠忠の事績のなかで最も古く、[27]書状の内容にしても、彼がこの当時、十市家の実質的な当主として活動していたことを示すものだからである。

遠忠の父遠治（新次郎、のち新左衛門尉）[28]は、天文三年（一五三四）二月二十一日没とされ、[29]それまでの期間（明応～享禄年間）、十市氏の事績は基本的にこの遠治のものとして扱われている。だが遠治自身の確実な事績は永正十四年（一五一七）十月の比丘尼慶周大仏殿燈油料水田寄進状（東大寺文書・一四

四九）にみえる袖署判「十市新左衛門尉（花押）」[30]が最後である。以後の記録には単に「十市」と記されるのみで、個人の特定はできない。この間、（主に文芸資料だが）旺盛な活動がみられるのは、むしろその息遠忠のほうである。とすれば永正末年には、遠治は存命であったにせよ（病床にあったか）、十市家の主権は遠忠に移譲されていたと考えるのが妥当だろう。

なお当時の十市氏は、同じく大和の有力国人であった越智氏の押領によって、牢人生活を余儀なくされていたらしい。

十市ノ跡ハ未越智知行之也、近日十市在京之身上、蓬住之細身也ト云々、（祐維記抄永正十七年八月条）

この所領は畠山尾州家被官遊佐順盛（［3］の宛所にもみえる）のとりなしによって、翌大永元年五月に返却され、「十市」も大和へ「還住」することになる（祐維記抄）。従来、すべて遠治の事績とされていた記事であるが、[31]ここにみえる「十市」とは実質、遠忠を指すのだろう（［16］は同年のもの）。遠忠は永正十七年当時、二十四歳。在京していたとあり、後々の京都歌人との親交の素地は、この時培われたのかもしれない。

次に、遠忠と足利義稙との関わりを示す資料として、畠山順光の書状を紹介したい。

［11］畠山順光書状（11丁紙背）

長谷川衆事、連年対此方無等閑候、仍去年被成御下知（足利義稙）候、就今度御入部不可存疎意之通申遣候、定』可為其覚悟候哉、毎事又仰合候者可然候、恐々謹言、

六月廿日　順光（畠山）（花押）

十市兵部少輔（遠忠）殿』

畠山順光は義稙の同朋衆木阿弥の息。畠山の名字を与えられ（入名字）、式部少輔を称した義稙第一の忠臣である。[32]この書状も義稙の意を達したものとみてよい。

長谷川衆は、連年こちら（義稙方）に対し協力的でありましたので、去年「御下知」があったのです。今度の御入国につきましても疎意なきよう、お伝え致します。きっとその心づもりもある事でしょう。毎度またご相談できればと思います、というものである。

「長谷川衆（党）」は大和六党の一、十市氏が刀自（盟主）をつとめた武士団である。十市氏は永正年間、義稙（将軍）―義澄（前将軍）の抗争の際に、筒井氏らとともに「義稙方」に加勢したから、「連年対此方無等閑」とはそのことをいっているのだろう。[33]これによる「去年」の「御下知」が具体的になにを

指すか不明だが、直後にある「御入部」、つまり義稙の大和入国の計画を伝えている点は注目される。

そこで問題となるのは書状の年次だが、永正十七年段階で「在京之身上、蓬住之細身」（前掲祐維記抄）であった遠忠にこうした伝達をするとは考えがたく、やはり大和に帰国した大永元年と捉えるのが穏当である（すると「去年」の「御下知」とは、十市の所領返還に関する処断を指すことになろう）[34]。日付の六月二十日時点で義稙がすでに淡路に渡っていたことを考えると（出奔は三月）、大和入国は、義稙の京都奪還のための経路として設定されたものではないか。この入国は結局実現せず、真意は不明というほかない。ただ出奔後の義稙にとって、遠忠がその主要な協力者と看做されていたことが、ここに諒解されるのである。

東山殿御詠の紙背文書には他にも、義稙方に関わる書状が存在している（[3・20・23]）。従来、単に「親義稙」と理解されていた遠忠の事績を具体的に肉付けすることが出来るだろう。またいっぽう、本紙背文書には、六角氏（[2・6・8・18]）や本願寺（[10・20]）等、従来交遊が把握されていない勢力との書状も散見される。これらの整理・精読はすべて今後の課題となる[35]。

遠忠関係の書状は、三条西家旧蔵本の紙背文書をはじめ、春日大社文書、東大寺文書等の中にそれなりの数が残るが、多く受給者側との関わりに応じた文芸や祭事関係の内容であり、彼の武将として側面を窺えるものは少ない。対して東山殿御詠の紙背文書群は、反古であるにしろ、遠忠のもとに蒐積された十市家の文書といえる。彼の全人像を把握する上で看過できない史料群であることに疑いはない。

むすび

以上、尊経閣文庫に蔵される孤本、東山殿御詠の基礎的側面につき、整理と検討を行い、書写者である十市遠忠の事績についても伝来や紙背文書に基づき見解を述べた。

東山殿御詠に収録される内容は、興行・収録歌ともにほぼ全てが本書によって知られるものであり、これを写し留めた遠忠の功績は大きい。遠忠の蒐集した歌書類に稀本・善本が極めて多いことは、はやく井上宗雄氏が述べているところであるが[36]、本書もまさしくそうした稀本の一に入るものであろう。義政・

雅親等の歌風を精査する素材として活用が望まれる。

また本書の第二の特色は、全丁にのこされている紙背文書である。三節で述べたように、尊経閣文庫には遠忠関連の典籍が復数収蔵されているが、紙背文書をもつものは東山殿御詠が唯一であり[37]、本書はその点でも特異な位置にある伝本といえる。

遠忠は室町時代にあって比較的有名な武将である。だが彼はあくまで大和の国衆であり、記録に残る事績も断片的なものに限られている。彼が遺した膨大な詠草・典籍は、そうした情報の欠を補うに余りあるが、これに頼るがあまり、遠忠の歌人としての側面や評価が、かえって肥大化してしまった憾みもある。大和国の一武将である遠忠が、いかに和歌と出会い、熱愛するにいたったのか、武将としての伝記を追い、その背景を探ることも重要である。

本稿で積み残した課題は多い。特に紙背文書については、全文の早急な校訂・公開の要があろう。向後の検討を期して、ひとまず稿を閉じることとしたい。

＊資料の引用は特に断らない限り既刊の校訂テキストに拠り、適宜表記を改めている。

注

1　川上「足利義政文芸資料考―家集および連歌資料について―」『三田國文』65号、二〇二〇・一二。

2　『国書総目録』では、統一書名「慈照院前左大臣義政公詠」として掲出され、伝本に東北大学附属図書館狩野文庫蔵本（四・一〇六八九・一）が収録されるが、内容は(2)源義政集（定数歌集成）である。注1論文参照。

3　井上宗雄a「十市遠忠について」（『言語と文芸』50号、一九六七・一）、同b『中世歌壇史の研究　室町後期〔改訂新版〕』（明治書院、一九八七〔初出：一九七二〕）、武井和人『十市遠忠和歌典籍の研究』（武蔵野書院、二〇二〇）等。

4　井上宗雄『中世歌壇史の研究　室町前期〔改訂新版〕』（風間書房、一九八四〔初出：一九六一〕）第六章・3。

5　『新編私家集大成　中世Ⅳ』「12義政」解題（大島貴子項目執筆）。

6　石澤一志・武井和人・日高愛子・山本啓介「室町期歌会資料集成稿―釈文と略解題―(九)」（『研究と資料』81号、二〇一九・七）に翻刻。なお、同時期に義政・雅親が参

7 加していた月次歌会に禁裏主催のものがあるが、こちらは日時が十八日で固定であり、形式も五十首の続歌（定数歌題を分担詠歌する）である。

唯一、長禄四年二月は十六日（㉛）と十九日（㊸）の興行が重複するが、後者については歌題が「卯花初開・郭公未遍・被書恨恋」と初夏の題を中心に組まれている。これは「四月」の誤りである可能性が高い。

8 川上「室町時代公武月次歌会の諸相―応仁・文明の乱を軸に―」『藝文研究』118号、二〇二〇・六。

9 ただしこのうち一題の歌会は四箇度におよぶ（❶❷❹❺）。室町殿月次会での一首歌会は正月のみだが、東山殿御詠の収録期間で、正月興行が未載の年は、三年分（寛正三年・同六年・文正元年）で、数が合わない。そのため、❶～❻の歌群についても、月次歌会以外の出詠歌が存在していることに留意する必要がある。

10 他出の定数歌は、全て井上宗雄・中村文編『中世百首歌八』（古典文庫522、一九九〇）所収。歌番号もこれによる。

11 義政が過去の詠を流用した事例自体は存在する。「月そとふ人は音せぬ柴の庵の扉をたゝく松のあらしに」（公宴続歌〔索引叢書46〕・三八三一・閑居月）は、文明十三年九月十八日禁裏月次御会における義政詠だが、同じ歌が文明十七年百首（四四）に「山家月」詠として見えている。

12 ただし東山殿御詠内では、㊶寛正二年十二月十三日室町殿歌会「195冬車」と、㊽年時不明❻「232冬車」とが要因は不明ながら重複する。

13 三首通題の歌会であることから、室町殿の月次歌会（正月のぞく）の可能性があるが、一座の全貌が知れる長禄二年時点での富子の参加は確認できない（室町殿月次和歌）。ただ次代義尚の月次歌会始には、義政とともに出詠しているため（文明十一年記）、乱前の月次会においても、途中から人数（参加者）に加わっていたとしても疑問はない。

14 三条冬子については、吉野芳恵「室町時代の禁裏の上﨟―三条冬子の生涯と職の相伝性について―」（『国学院雑誌』85巻2号、一九八四・二）、松薗斉『中世禁裏女房の研究』（思文閣出版、二〇一八）第四・五章〔初出：二〇一六・二〇一五〕等を参照。

15 井上注1a論文。

16 金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫（特・一六〇三・八・一）。

17 武井和人「室町後期南都における和書の相承―一条兼良・実暁・十市遠忠をめぐって―」注2著書所収〔初出：二〇〇三〕。なお「興福寺之内明王院書籍之覚」については、同書資料篇・上に翻刻収録。

18 なお遠忠筆である明徴は、本書の外的情報からは得られないが、筆跡が他の遠忠筆典籍と相違ないこと、また書状の反古を用いた私的な手控えであることに鑑み、本稿では遠忠筆と断定した。

19 武井注2著書『中世歌合伝本書目』（中世歌合研究会編、明治書院、一九九一）等参照。

20 井上宗雄・伊藤敬・福田秀一編『中世歌合集と研究（続）』（未刊国文資料第四期第三冊、一九七四）一一〇頁。執筆は井上氏。なお同様の見解は井上注1a論文にて、早くに示されている。

21 武井注2著書資料篇・下に「4五十番歌合（享禄三年春）」としてに翻刻収録。

22 興福寺明王院旧蔵。「興福寺之内明王院書籍之覚」（注17参照）に「一常徳院殿三百首和歌／常徳院殿御自筆／遠忠奥書有之」としてみえる。

23 遠忠筆相伝奥書に「右御詠草御自筆也、自李阿遠忠相伝之、于時享禄二年十一月日」とある。

24 後述［16］が大永元年（［11］も同時期か）。［14］の発給者遊佐尭家は、大永七年に没しているためそれ以前。比較的時代が下るのは［20］下間頼秀書状で、発給者の頼秀は享禄年間以降に名の見える本願寺の上座。

25 天文八年（一五三九）没なので、さらに下る可能性もある。以下、書状の翻刻は本稿末尾「前田育徳会尊経閣文庫蔵『東山殿御詠』翻刻」の［凡例］に基づいて行った。

26 戦国期の畠山総州家の奉行人については、川岡勉「河内国守護畠山氏における守護代と奉行人」『室町幕府と守護権力』（吉川弘文館、二〇〇二〔初出：一九九七〕）、馬部隆弘「畠山家における奉書の展開と木沢家の出自」『戦国期細川権力の研究』（吉川弘文館、二〇一八）第二部第五章〔初出：二〇一七〕等、参照。

27 従来の指摘は、玄誉法師詠歌聞書大永三年（一五二三）

閏三月末の詞書。「後三月末つかたに遠忠方へ／君すめは花もさこそと山里に春はことさらゆく心哉」（一八）。歌番号は『新編私家集大成』による。

28 多聞院日記永正三年（一五〇六）三月十五日条所載の奉加帳に「十市新次郎遠治」とみえ、没後の同記天文十一年（一五四二）十月一日条には「兵部少輔（遠忠）親父新左衛門」とある。後述の永正十四年十月の「比丘尼慶周大仏殿燈油料水田寄進状」には「十市新左衛門尉（花押）」としてみえるから、この間名乗りを改めたのであろう。

29 この日時は、朝倉弘『奈良県史 11大和武士』（名著出版、一九九三）三七六頁をはじめ、諸書に散見されるが、現状一次資料に基づいた確実な記述を見出すことができない。大方のご教示を乞う。

30 花押が「〔年次未詳〕正月八日十市遠治書状」（春日大社文書・八八八）に一致する。

31 朝倉注29著書。

32 順光については、設楽薫「足利義材の没落と将軍直臣団」（『日本史研究』301号、一九八七・九）、萩原大輔「足利義尹政権考」（『ヒストリア』229号、二〇一一・十二）、山田康弘『足利義稙―戦国に生きた不屈の大将軍―』（戎光祥出版、二〇一六）、川口成人「畠山順光・維弘―流浪の将軍に尽くした異色の畠山氏」『戦国武将列伝7 畿内編【上】』（天野忠幸編、戎光祥出版、二〇二二）等を参照。

33 さらに義稙は永正十四年（一五一七）に、順光を大和に遣わし、旧義澄派の越智・古市氏を攻めている（祐維記抄四月十七日条、山田注32著書参照）。十市氏の動向ははっきりとしないが、おそらくこの時も順光方に加勢し、知遇を得たのだろう。

34 十市氏の所領回復を取りなしたのは、先述の通り尾州家被官遊佐順盛であるが、祐維記抄永正十七年六月十九日条には「尾州御曹司河内二郎殿（畠山稙長）幷細川殿（高国）被仰之」て順盛が派遣されたとある（ちなみに交渉の主眼は大和国人の一揆（和睦）である）。この時点では高国と義稙は決裂しておらず、義稙の意向が背後にあったとみても不自然ではない。

35 以下、現状判読しえた範囲で紙背文書の翻刻を列挙する。二次利用面（歌集）の裏うつりを反転し、なかば強引に

翻刻したため、誤読も少なくないと思う。ご批正を切に願う次第である。

[3] 十市遠忠書状土代（3丁紙背）

□度御帰参雖早々可申入候、□兎角罷過候、非本意候、仍太刀一腰進入候、表祝儀計候、於後向別而無御等閑候者、可為祝着候、此方儀連々其御屋形様（畠山尚順）江得御意儀候、態御『雑掌可申入候、閣筆候、恐々謹言、

五月一日　遠忠（花押）

遊佐河内守（順盛）殿』

[4] 真慶書状（4丁紙背）

就孫息誕生之儀、御太刀一腰御馬壱疋送給候、畏入存候、御懇之儀一段祝着之』至候、目出度候、恐々謹言、

九月十八日　真慶（花押）

十市兵部少輔殿』

[6] 進藤貞治書状（6丁紙背）

尊札委細令拝見候、仍桃尾儀蒙仰候、三筑（三好元長）書状候分も相違候歟、殊道永（細川高国）江自越智方切々被申候、其段□□対筒井被申送候、猶大南殿江申候、□□両種二荷送給候、毎度□連々儀令□□之時、追而可申入候、恐惶謹言、

二月廿八日　貞治（進藤）（花押）　○以下闕』

[7] 十市遠忠書状土代（7丁紙背）

先段度々以書状申入候、此方雑掌□津仕候、致祇候万端可得御意候、雖不珍儀候、可然様仁取合奉頼候、御屋形様江自六角（定頼）殿被申候、□同時御礼申上由候、彼方之儀』□余儀候間、乍恐別而預御披露□（候）者所仰候、就中摂州衆各□由候条、定而諸口御手遣□（可）為近日候哉、預示候者可為祝着候、併御入魂可畏存候、委細雑掌可申分候、能々可得尊意候、恐惶謹言、

[　　]　□□（遠文か）（花押）　○以下闕』

[8] 狛「頼」書状（8丁紙背）

就御入国之儀、委細蒙仰□（三カ）筑令存知候、於時宜者新四郎（進藤貞治）殿へ令申候、仍在洛付而去程天野三荷令拝領候、御□（懇カ）切之至、難申謝候、遼遠之境之条、一入畏悦計候、兼又雖極存其憚多候、折節恩来之間、鮒鮨桶一数五十令進入候、猶委曲御使へ令申候間、不能詳候、恐惶謹言、

三月十六日　頼（狛）（花押）　○以下闕』

[10] 下間頼秀書状

其後久不申通候、非本意候、仍従院家太刀一腰馬一疋、鹿毛印雀目結、以書状被進之候、猶得其心可申入之旨候、随而一腰進献候、祝

詞計候、□而可被申之処何□□□迷之候、委細之段従本善寺可被申候、恐々謹言、

十月十四日　頼秀（下問）（花押）　○以下闕『

［18］十市遠忠書状土代（18丁紙背）

当春御慶雖事旧候、猶以珍重遂日重畳不可有際限候、仍御太刀一腰致進上候、表祝儀計候、猶大南伊豆守『□（可）申上之由、宜可預御披露候、恐惶謹言、

三月五日　遠忠（花押）

狛修理亮（頼）殿

進藤新介（貞治）殿『

［21］遊佐長清書状（21丁紙背）

就御礼儀、御太刀一腰御馬一疋幷年始之為御礼同御太刀一腰令披露候、□何も目出度祝着之旨、自社可然様ニ』相心得可申入之由候、次以直書可被申入之候、依委曲別紙ニ申之条、不能詳候、恐々謹言、

二月一日　長清（遊佐）（花押）

十市兵部少輔殿『

［23］斎藤時基書状（遊紙1丁紙背）

油煙代五十疋送給候、祝着至候、

当年之慶賀誠之珍重□、□（其）後久御無音之条御無心元□、委細承候、抑御上洛之□尋候、過半相調之条可有令心得候、於今後之儀者諸□□忠節次第之旨議定□□等之間、近日者以愚息諸□□披露候、使僧承子細候、以同□□（名カ）近天夫猶御使僧申候様体□年一途御返事可申候、□□（自）然之儀不可有疎意候、併□□（期カ後）信候、恐々謹言、

十月廿一日　時基（斎藤）（花押）　○以下闕『

36　井上注1a論文。「管見に入った二十五ほどの遠忠筆蹟本（伝を含むが）の内、十六は孤本・希本または注意するに足る善写本である」。

37　ただし「興福寺之内明王院書籍之覚」（注17参照）にみえる典籍のうち「近当聞書歌抄」と「詠歌聞書」の二点には「反故之裏ニ書之」という注記がみえる（ともに現存不明）。

番	興行番	年号	西暦	月	日	興行	始番	終番	歌題	作者
1	⑯	長禄四	一四六〇	1	25	長禄四年正月二十五日室町殿歌会	60	61	松色春久	義政（無記名）・飛鳥井雅親
2	㉜			2	16	長禄四年二月十六日室町殿歌会	143	148	隣家梅・夕春雨・寄海恋	義政・雅親
3	㉖			3	15	長禄四年三月十五日室町殿歌会	111	116	惜花・雲雀・閑居	義政・雅親
4	㊹			4?	19	長禄四年二月十九日室町殿歌会	207	212	卯花初開・郭公未遍・被書恨恋	義政・雅親
5	⑳			6	26	長禄四年六月二十六日室町殿歌会	75	80	蓮露・夕立・暁恋	義政・雅親
6	㉓			7	29	長禄四年七月二十九日室町殿歌会	93	98	早涼知秋・野外草花・湖水眺望	義政・雅親
7	㉑			8	25	長禄四年八月二十五日室町殿歌会	81	86	秋色・秋声・秋香	義政・雅親
8	㊷			10	26	長禄四年十月二十六日室町殿歌会	199	200	竹不改色	義政・雅親
9	㉙			11	13	長禄四年十一月十三日室町殿歌会	129	134	水鳥・積雪・述懐	義政・雅親
10	㉚			1	13	寛正二年正月十三日室町殿歌会	135	136	寄国祝	義政・雅親
11	㊼			4	13	寛正二年四月十三日室町殿歌会	225	230	更衣惜春・民戸早苗・相互忍恋	義政・雅親
12	㉔			5	28	寛正二年五月二十八日室町殿歌会	99	104	郭公・蚊遣火・野風	義政・雅親
13	㉞	寛正二	一四六一	6	13	寛正二年六月十三日室町殿歌会	151	156	蟬・泉・恋	義政・雅親
14	㉗			8	29	寛正二年八月二十九日室町殿歌会	117	122	月前風・禁中月・寄月旅	義政・雅親
15	⑤			11	27	寛正二年十一月二十七日室町殿歌会	11	16	山冬月・狩場雪・寄舟恋	義政・雅親
16	㊶			12	13	寛正二年十二月十三日室町殿歌会	193	198	冬煙・冬江・冬車	義政・雅親
17	㊺			2	13	寛正三年二月十三日室町殿歌会	213	218	浜余寒・水辺柳・祈逢恋	義政・雅親
18	④			6	13	寛正三年六月十三日室町殿歌会	8	10	夏天象・夏地儀・夏雑物	義政
19	㊸	寛正三	一四六二	8	13	寛正三年八月十三日室町殿歌会	201	206	鹿声何方・浦辺見月・樵路夕雨	義政・雅親
20	⑱			11	13	寛正三年十一月十三日室町殿歌会	63	68	石間氷・雪似花・閑居恋	義政・雅親
21	㊳			12	13	寛正三年十二月十三日室町殿歌会	175	180	月照網代・家々歳暮・雲隔遠望	義政・雅親
22	㉝			1	13	寛正四年正月十三日室町殿歌会	149	150	庭梅久盛	義政・雅親
23	⑧			2	13	寛正四年二月十三日室町殿歌会	29	34	尋花・春駒・初恋	義政・雅親
24	②	寛正四	一四六三	4	13	寛正四年四月十三日室町殿歌会	2	4	首夏藤・名所夜月・寄雨恋	義政
25	⑥			6	13	寛正四年六月十三日室町殿歌会	17	22	行路夕顔・夏夜待風・思不言恋	義政・雅親
26	⑨			12	13	寛正四年十二月十三日室町殿歌会	35	40	桧原雪・暁埋火・寄民祝	義政・雅親

27	①	寛正五	一四六四	1	13	寛正五年正月十三日室町殿歌会	1	1	椿葉契久	義政
28	㉛			2	30	寛正五年二月三十日室町殿歌会	137	142	早蕨・春月・里竹	義政・雅親
29	㉕			3	26	寛正五年三月二十六日室町殿歌会	105	110	花下送日・春雉思子・寄濈尽恋	義政・雅親
30	㊲			5	28	寛正五年五月二十八日室町殿歌会	169	174	夕橘・五月雨・恋衣	義政・雅親
31	㉘			6	13	寛正五年六月十三日室町殿歌会	123	128	名所氷室・樹陰如秋・岸頭待舟	義政・雅親
32	㊱			9	27	寛正五年九月二十七日室町殿歌会	163	168	河月・菊露・関鶏	義政・雅親
33	㉒			10	13	寛正五年十月十三日室町殿歌会	87	92	嵐吹寒草・浦伝千鳥・依恋祈身	義政・雅親
34	㉟			12	23	寛正五年十二月二十三日室町殿歌会	157	162	夜雪・炭竃・変恋	義政・雅親
35	㊻	寛正六	一四六五	4	13	寛正六年四月十三日室町殿歌会	219	224	未忘春花・郭公一声・寄名所恋	義政・雅親
36	㊵			5	13	寛正六年五月十三日室町殿歌会	187	192	瞿麦・鵜河・門杉	義政・雅親
37	⑲			6	23	寛正六年六月二十三日室町殿歌会	69	74	夕立風・六月祓・被厭恋	義政・雅親
38	⑦			9	14	寛正六年九月十四日室町殿歌会	23	28	擣衣到暁・雨添紅葉・疑真偽恋	義政・雅親
39	③			10	27	寛正六年十月二十七日室町殿歌会	5	7	野霜・冬月・暁野	義政
40	⑪			12	13	寛正六年十二月十三日室町殿歌会	42	47	雪似白雲・梅告春近・夜過関路	義政・雅親
41	㊴	文正元	一四六六	3	30	文正元年三月三十日室町殿歌会	181	186	谷残花・暮春鐘・寄弓恋	義政・雅親
42	⑬			7	26	文正元年七月二十六日室町殿歌会	50 57	52 59	七夕糸・古砌荻・忍絶恋	義政・雅親
43	⑩	—	—	—	—	年次不明❶	41	41	鶯是萬春友	義政
44	⑫					年次不明❷	48	49	迎春祝言	義政・雅親
45	⑭					年次不明❸	53	55	夏天象・夏地儀・夏雑物	義政
46	⑮					年次不明❹	56	56	椿葉契久	義政
47	⑰					年次不明❺	62	62	鶴有遐齢	義政
48	㊽					年次不明❻	231	233	池半凍・冬車・荻	義政
49	㊾					年次不明❼ ＊他歌書の抄出ヵ	234	239	衾・桜・沢若菜・関月・鶯・馴恋	義政
50	㊿					年次不明❽	240	245	山霞・待恋・祝言	義政・上様（日野富子）
51	51					年次不明❾	246	254	嶺雪・千鳥・絶恋・竹契齢・忍恋・待時鳥・野霜・冬月・眺望	義政・大裏上臈（三条冬子）・藤大納言殿（日野勝光）・雅親

○前田育徳会尊経閣文庫蔵『東山殿御詠』翻刻

［凡例］

一、前田育徳会尊経閣文庫蔵『東山殿御詠』（一二・二七・書）の全文を翻刻する。

一、漢字の正字・異体字については「歌・哥・謌」のように使い分けがなされる場合のあるものを除き、全て現時通用の字体に改めた。

一、改頁の箇所は「』」を付し、丁数・表裏を示した。

一、虫損により文字が欠損しているものは□、残画から文字が判断できるものは、その文字を□で囲い示した。

一、誤脱が想定される箇所は、（ママ）と傍記し、内容が推定できるものについては〔某カ〕のように示した。

一、人名や参考のための注記は、（　）を以て傍記、あるいは本行中に記した。特に飛鳥井雅親・日野富子詠のように歌題と和歌との間に距離があるものについては、歌頭に歌題を示している。その他、適宜「＊」を付して注記した。

一、ミセケチは左傍に「ミ」、右傍に訂正内容の形で示した。

一、補入については原則行内に収め特に示していない。

一、各歌頭に通し番号を付した。重出歌に関しても別個に扱っている。

一、末尾に《初句索引》を付した。その際仮名遣いは、本文の用字に関わらず歴史的仮名遣いに統一した。

《翻刻》

東山（朱筆）和哥集

（十二行分空白）

東山殿御詠　』1オ

御詠　慈照院（足利義政）殿　』1ウ

椿葉契久　寛正五　正十三

1さらにいま八千代をちきるたまつはき
つら〳〵おもふしるそ久しき

首夏藤　名所夏月　寄雨恋　寛正四　四　十三

2ぬれて折し名残とそみる春過て
いく日もあらぬやとのふちなみ

3いとゝなをみるほともなきなつみ川

かたふく月のやまかけにして
4とはぬ夜は身をしる雨のかきくらし
おちこそまされ袖のたまみつ
野霜　冬月　眺望　寛正六十　廿七
5見し秋の千草は夢かかれはつる
たまつらの野の霜のあけほの
6いまもたゝ雪の木のまをもるほとは
月と花とのはるのおもかけ
7わたのはらたなひく雲のはれゆけは
おきにかすそふあまのつりふね
夏天象　夏地儀　夏雑物　寛正三六　十三
8山風に行かふ雲のひまみえて
かたへそはるゝゆふたちのあめ
9むすふ手に夏をわすれて山の井の
あかぬ木かけにけふもくらしつ
10ひまもなくならすころかないまいくか
あらはをくへきねやのあふきを
山冬月　狩場雪　寄舟恋　寛正二十一　廿七
11さやけさは秋にまさきもちりはてゝ

『2オ

と山の月のかけそさひしき
12たつ水の行ゑも見えすふる雪に
あはせかねたる野へのたか人
13ねをそなく人にこゝろをおきつとり
鴨といふふねよそにこかれて
14にほのうみの浪ちこほりていてぬらし（山冬月）
みやこにさゆるやまのはの月　雅親（飛鳥井）
15ふる雪に道たと〳〵しかへるさの（狩場雪）
つきまつはかりかりやくらさむ
16さはるしもえにやあるらん身をうらに（寄舟恋）
あし分をふねこきかへりつゝ
行路夕顔　夏夜待風　思不言恋　寛正四六　十三
17たよりにやおりて見つらん玉ほこの
ゆくてにさけるゆふかほのはな
18もとあらの小萩か露にあらねとも
なつのよとこにかせそまたるゝ
19つゝむそよおもふとしらは太方（マヽ）に
なれぬる中もとをさかるやと
20まかきそとみれはさなからみちつらの（行路夕顔）

『3オ

『2ウ

しつか軒はにさけるゆふかほ　雅親
21 あつき日のなを名残ある岩かねに（夏夜待風）
水せくよひもまつかせの声
22 いたつらにおもふすちをもいはぬまの（思不言恋）
うきみくりなはくちやはてまし

擣衣到暁　雨添紅葉　疑真偽恋　寛正六九　十四

23 夜やさむきねさめてきけは里人の
なをうちしきるあさのさころも
24 むらしくれはれぬるあとにたちそひて
ゆふ日もそむるみねのもみちは
25 ひとかたにえこそたのまねいつはりの
ある世にちきる人のことの葉
26 またきなくゆふつけ鳥かからころも（擣衣到暁）
おりはへ月にあかすうつ夜を　雅親
27 けさそなをふりいてのいろはあらはるゝ（雨添紅葉）
昨日しくれしやまのもみちは
28 ちきりしをたのみもはてぬこゝろをは（疑真偽恋）
見えしや人のうらみもそする

尋花　春駒　初恋　寛正四二十三

『3ウ

29 さく花のみまくほしさにけふいくか
行てはきぬるはるのやまみち
30 春あさきみきはの草をふみしたき
沢辺にあさるつるふちのこま
31 うちつけの色にややかてみえなまし
つゝみもなれぬ袖のなみたは
32 のとかなる宮古の春のやともりや（尋花）
山ちのはなをおもひやる覧　雅親
33 はるのくるそなたの風にあたりても（春駒）
いはえにけりな野辺のあらこま
34 さはるともまよひやゆかん我恋の（初恋）
やま口しるくしけき人めに

桧原雪　暁埋火　寄民祝　寛正四十二　十三

35 名のみして山はあなしのをともなし
ひはらのこすゑゆきつもるころ
36 をくしもやあかつきふかくなりぬらん
きえぬもさむきねやのうつみ火
37 かしこしな畔をゆつりしいにしへに
民のこゝろもかへるとき代そ

『4オ

『4ウ

38 (松原雪)ゆく人もかしらの雪をはらふらし
おひのひはらの山のした道　雅親
39 (暁埋火)ねさめして道をも身をもおこしえぬ
思ひのともとむかふうつみ火
40 (寄民祝)これそこのきみかめくみとみゆる世を
おもひもしらて民そさかふる
鶯是万春友
41 ちきるそよ千とせのし(春カ)るを十かへりの
松よりすたつやとのうくひす
雪似白雲　梅告春近　夜過関路　寛正六 十二 十三
42 たつは雪つもるは雲かいつれとも
えこそみわかねをちの山のは
43 またきよりにほひもしるくかつさきて
音(春歌)をもよほす庭の梅かえ
44 関の戸もさすよならねはをのつから
よるもそこゆるあふさかの山
45 (雪似白雲)たつとみし横川の雲の色なから
ゆきの八重やまみねとちにけり　雅親
46 (梅告春近)こゝろありて春のとなりをとへとてや

『5オ

片枝つれなきむめのはつ花
47 (夜過関路)くらき夜にこえてやすらふ相坂の
とりのはつねをあとにこそきけ
迎春祝言
48 色そそふしけき柳のいとなみも
かわらぬやとに春をまちえて
49 わかきみの御代をのとけみあら玉の
としゆきかへり春もきにけり　雅親
七夕糸　古砌荻　忍絶恋　文正元 七 廿六
七夕糸
50 たか世よりこのはつ秋に初瀬女の
手にまく糸も空にかすらん
古砌荻
51 壁にふすこけも露せく庭ふりて
おき原とをみかせすさふころ
忍絶恋
52 くめちには跡のこれとも世にしらす
かけし一夜の峰のうきはし
夏天象　＊以下三首、直前ノ興行ト別日カ

『5ウ

53あまつ空よもにむら〳〵雲こりて
いとあつき日に吹かせもなし
夏地儀
54たえ〳〵に柴のしたみつなかれ出る
をとも夏なきひむろ山かな
夏枕物（雑カ）
55なかしてふほとはなけれとぬる夜半に
枕はしるや秋ちかきころ
椿葉契久　＊コノ歌、直前ノ会ト別日カ
56たまつはきひろき樹に皆人の
八千代のかけをたのむひさしさ
（以下七行分空白）
57たなはたのねかひの糸やいつよりか（七夕糸）
たえぬちきりにむすひをきけん
58すみわひてたれ秋かせをうらむらん（古間荻）
荻はらたかきふるさとのには
59人しれすしのふか原のかよひちは（忍絶恋）
しけるにつけてたえはてにけり
＊以上三首50～52ト同題ノ雅親詠カ

』6オ

』6ウ

松色春久　長禄四正　廿五
60いく千代そむかしの春をうつしうへて
今一しほのやとの松か枝
61春のいろかつみえてけり此やとに
松のおもはん千世の行末　雅親
鶴有遐齢
62池のおもによりくる浪のやしは子も
かす〳〵みゆる千代の友つる
石間氷　雪似花　閑居恋　寛正三十一　十三
63山川やいはまをせはみ行水の
なをたえ〳〵にこほるころかな
64ふりつもるこすゑの雪の花にさへ
さそふあらしをまたいとひつゝ
65人とはぬむくらのやとのひとりねは
おもひありともいかてしるらん（らせんゝゝゝ）
66こすなみのしつくもこりて山川の（石間氷）
いはまはたかくこほるころかな　雅親
67さくらしも花ともみゆるまき桧原（雪似花）
なひくは雪のすかたなれとも

』7オ

68 袖の色もふかきおもひに露けきを（閑居恋）
たゝにあさちかやとゝみる覧

夕立風　六月祓　被厭恋　寛正六 六 廿三

69 ゆふたちのなこりの露をふくかせに
あとまてすゝしにはの草むら
70 たれかけふ河辺のあさちひとかたに
かりの世いとふみそきしつらん
71 おもひのみなをはれやらぬうき身哉
なきたるあさの空にきえなて
72 浪たかき名残は見えてかさはやの（夕立風）
みほのうらはにすくる夕たち　雅親
73 春秋もぬさとたむけぬみそき川（六月祓）
おしむにゝたるなつのわかれち
74 しぬてなをしたふこゝろをいとふにや（被厭恋）
人もわすれぬうき身なるらん

蓮露　夕立　暁恋　長禄四 六 廿六

75 うちなひきかほるもすゝし風わたる
池のはちすのはなのゆふ露
76 夕たちの空になる神はきこえきて

『7ウ

照日をさくる雲のすゝしさ
77 おもひいてゝ袖こそぬるれつゆふかき
わけこし篠のしのゝめのそら
78 をふねこくさほのしつくもしら露の（蓮露）
たまこきちらす池のはちす葉　雅親
79 いつのまにみたれて雨のきほふらん（夕立）
ゆふたち雲のこりし山のは
80 うちなひきいまはたのまむゆめもやは（暁恋）
有明の月にかねひゝくなり

秋色　秋声　秋香　長禄四 八 廿五

81 山のはにうつるゆふ日の影までも
いつしか秋のいろや見ゆ覧
82 かすかなりさとのあきかせたえ〳〵に
さそふきぬたのあかつきのこゑ
83 ぬしやたれあかぬにほひのふちはかま
きてとふ人も嵐ふく野に
84 時雨にはまたそめやらぬかた岡に（秋色）
秋を色とるもりのうすきり　雅親
85 萩のうへの露をかたしくね覚かな（秋声）

『8ウ

『8オ

あはれ夜ふかきはつかりのこゑ
86 (秋香)山ちなる草は千世までにほふそと
やとにうつして君そしるへき

嵐吹寒草　浦伝千鳥　依恋祈身　寛正五十十三

87をく霜をはらふとみれは冬草の
なをしほれ行あさ嵐かな
88いつくにか友さそふらんさよ千とり
ことうら浪にこゑをとをさかる
89行末の玉のをかけていのるかな
なからへは又あふ世ありやと
90(嵐吹寒草)宮城野や露をもかりし萩かえは
またぬあらしにしもまかふころ　雅親
91(浦伝千鳥)つましたふいく浦千とりうかれきて
あくるとまやの月になく覧
92(依恋祈身)あふまての身をたにまもれ恋しなは
神もみしめの名はたちぬへし

早涼知秋　野外草花　湖水眺望　長禄四七廿九

93なつころも秋にもかふるものならは
今朝ふく風も袖にしられし

』9オ

94をきまよふ野はらの露にみたれあひて
おはなか袖もはきか花すり
95暮そむるかたえのおきの波まより
ほのかにみゆるいさり火のかけ
96(早涼知秋)袖むかふかせより秋のこゝろにて
いつしかすらしみる月のかけ　雅親
97(野外草花)露ふかみ花はむもれて野へはたゝ
いろのちくさの玉をしくころ
98(湖水眺望)志賀の山のかねやきく覧つり人の
けふもくれぬとこきかへるみゆ

郭公　蚊遣火　野風　寛正二五廿八

99きゝてなを物おもへとやほとゝきす
雲のはたてになきてすくらん
100かやりたくむくらのやとの夕けふり
思ひありとはよそにみゆらし
101やすくぬる夢もさむらしかるもかく
猪名野のをさゝかせさはくよは
102(郭公)なけやなををのかさ月はいくかしも
あらしいまはの山ほとゝきす　雅親

』10オ

103 蚊（蚊遣火）やりたくかたつ河霧の面影に
さとうちけふるよとのあけほの
104 あつま野（野風）にをかやおりしきさぬる夜の
夢もみたるゝかせすさふなり

花下送日　春雉思子　寄濁尽恋　寛正五　三　廿六

105 けふいくかきつゝなれぬる木のもとに
あかてちりなん花をしそおもふ
106 よるの霧のおなし思ひに音をそなく
籠のうちならぬ野辺のきゝすも
107 くちはてん袖やなみたのみをつくし
ふかきうらみのしるしなるへき
108 おほつかな花（花下送日）かけとひし夕つく夜
有明までのふるさとのそら　雅親
109 なれも子（春雉思子）はすてかたきよとくれ竹の
ねになくきゝすたつかたもなし
110 えに（寄濁尽恋）しあるとはかりもみよみをつくし
ほかゆく舟のまほならすとも

惜花　雲雀　閑居　長禄四　三　十五

111 あかすみてちらぬよりまつしたふかな
花にうつろふはるの日影を
112 こをおもふほとそしらるゝあかりても
やかてをちくる野辺のひはりは
113 人なくて風のとふなる庭のおもは
跡なきこけに露そみたるゝ
114 いさゝらは花なき里にやとかりて
ちるまてはみしこゝろつくしに　雅親
115 春ふかきすゑ（雲雀）のゝかすみなくひはり
空にのみしてたらぬ日もなし
116 しつか（閑居）にもすめるとしかな松のとし
竹のよはひをひとりかそへて

月前風　禁中月　寄月旅　寛正二　八　廿九

117 雲はれて月はひかりを花さかり
ふくやあらしもいとはてそみる
118 ところからわきてひかりをみかくらん
おほはの椋の木のまもる月
119 月かけのさやの中山たとらてや
よるもこえ行あきの旅人
120 身にそしむ雲きえはてゝ月影の（月前風）

『10ウ

『11オ

むなしきいろをはらふ秋かせ　雅親

121 衛士のたくほかけほのかにさ夜ふけて（禁中月）
　月は玉しく庭のしつけさ

122 旅にして月やみるらんとはかりは（寄月旅）
　思ひいつへきふるさとの空

名所氷室　樹陰如秋　岸頭待舟　寛正五六十三

123 わすれては冬かとそおもふひむろ山
　あたりもさゆる小野のあさかせ

124 これやこの涼しさまねく玉かしは
　木かけはまたきあきかせのふく

125 わたし舟いてつるあとの河きしに
　こきかへるまをまつそ久しき

126 松かさきとけぬひむろにをとさえて（名所氷室）
　春たつほとの風たにやなき　雅親

127 月もみぬかつらのもとのゆふすゝみ（樹陰如秋）
　あやしやあきにかよふかけかな

128 渡辺によふ舟いそけいこまやま（岸頭待舟）
　ゆふたちきほふ雲のかゝれる

水鳥　積雪　述懐　長禄四十一十三

』11ウ

129 とちはてぬ池のこほりのひまみえて
　たえ〳〵のこるにほのかよひ路

130 ふりくらす雪の高ねは中〳〵に
　うつもれてこそあらはれにけれ

131 しきしまの道のさかゆくときにこそ
　まなひえぬ身のほとはしらるれ

132 さゆる夜もかたみにこゆる声すなり（水鳥）
　はねうちきする池のおし鳥　雅親

133 ふりそめていつれまさことみえし色も（積雪）
　うつもれにける庭の雪かな

134 いひしらぬ世中なれやそむかれす（述懐）
　とすれはいとひとしをふる身は

寄国祝　寛正二正十三

135 くもりなくおさまりにける日のもとを
　他の国まてあふくときかも

136 草木まてなひく国とは我君の
　めくみの露もかためをくらし　雅親

早蕨　春月　里竹　寛正五二廿日

137 雲のころ山のかけ野のしたわらひ

』12オ

』12ウ

おるてもさむき春の里人
138かすめた、いつもさやけき影はみつ
春の名におふおほろよの月
139くれ竹の伏見の里の庵までも
すなをなる世はすみよかるらし
140ましはとる峰のたよりのはつわらひ（早蕨）
つみはやしつ、いつる山人　雅親
141やへかすみもらぬ夜もなし春はなを（春月）
月やくりそふひかりなるらん
142かすならぬ里のかきほも此君の（里竹）
すなほにきよきいろはみせけり
隣家梅　夕春雨　寄海恋　長禄四　二十六
143たおるとも人はとかめしわかかたに
かきほさきこす梅の一えた
144さほ姫のころもはるさめふるからに
日もゆふくれのほとそしられぬ
145なき名のみたかつの海のうら風に
袖こそぬるれおきつしらなみ
146わかかたにみゆるたち枝をとふ人や（隣家梅）

『13ウ

『13オ

思ひのほかのやとの梅か香　雅親
147暮行や尾上の松のふるみとり（夕春雨）
ひとしほさひし春雨のそら
148唐人もあはれはかけよいたつらに（寄海恋）
まくらの浪の袖ぬらす夜を
庭梅久盛　寛正四　正　十三
149いく春もなれてみきりにさくや此
花のさかりを契るひさしさ
150天の下の春をいく世に、ほふらん
ひとはなよりのやとのむめか枝　雅親
蝉　泉　恋　寛正二　六十三
151村雨のすくる杪になくさみの
はにおく露をはらふゆふかせ
152夏ふかきいはゐの水のす、しさに
秋のけしきをくみてしるかな
153恋しなはせめてあはれと人も見よ
あふにはかへぬいのちなりとも
154くもりなき空にしくれて山風に（蝉）
ゆるかぬ木すゑせみそ鳴らん　雅親

『14オ

155(泉)千代をくむところもこゝといわほたて
さゝれ石敷く泉すらしも
156(恋)いかなりし身のわれまてかむくひある
世につれなさをなけきつくせる
夜雪　炭竈　変恋　寛正五 十二 廿三
157ふるよりもつもるとそみるすむ月の
光をかはす庭のしら雪
158爪木こるほとそと見えてしはし又
けふりそたゆむみねのすみかま
159たのめつるせゝはかはりてあすか川
なみたや袖のふちとなるらん
160(夜雪)風しほるまとのくれ竹をとなきに
きこゆる雪のふかき夜の空　雅親
161(炭竈)宮古より山路にかへるすみやきの
しるへにもたつ夕けふりかな
162(変恋)もらさしと氷むすひしいはし水
いかなるかたにとけてすむらん
河月　菊露　関鶏　寛正五 九 廿七
163いにしへの鏡もかけをかはるらし

『14ウ

玉しま川の秋のよの月
164千代までの秋にちきりやむすふらん
山路の菊の花のしらつゆ
165あくる夜の時をたかへぬあふさかの
せきしまさしき鳥のこゑ哉
166(河月)みかくれてなひく玉藻のくまもなし
川のせとをる月のひかりに　雅親
167(菊露)暮ゆけとはなもくもらぬしら菊は
色なる露やをきそはるらん
168(関鶏)あくる夜のさかひに鳥の声はして
関のうちともくらきあふ坂
夕橘　五月雨　恋衣　寛正五 五 廿八
169ふく風に匂ひやそれとなのるらん
たそかれときの軒のたちはな
170をやむまのしはしはあはれとはれぬへき
空とも見えぬ五月雨のころ
171とし月をとはてふるきの皮衣
うらみもふかくなりまさるらん
172(夕橘)さらてたにしのふむかしをたち花の

『15オ

『15ウ

もよほしかほににほふ夕かせ　雅親

173（五月雨）をとめ子か袖ふるやまのみる雨に
　雲のかよひちとちぬ日もなし

174（恋衣）面影のうきにおとろくさ夜ころも
　夢をしやりてかへしてそぬる

月照網代　家々歳暮　雲隔遠望　寛正三十二　十三

175月かけのやとる川せによるひをの
　数さへみゆる宇治のあしろ木

176年をゝくり春をむかへてやとことに
　いとなみしるく見ゆる比かな

177そことなく波ちはるかになりむれは
　雲こそ海のかきり成けれ

178（月照網代）したくゝるひをさへみえてにほの海の
　網代にさゆる月のかけかな　雅親

179（家々歳暮）たかやともしつ心なしとしの暮
　たちぬふ袖はいろかはれとも

180（雲隔遠望）めにちかくむかふ山のは雲かけて
　又はるかなるなみのうへ哉

谷残花　暮春鐘　寄弓恋　文正元三廿日

『16オ

181春ふかき谷の木かけの一もとは
　風やよきけん花やつれなき

182きくもうし春の日かすははつせ山
　尾上にかすむいりあひのこゑ

183かくとたにえやはおもひもしらま弓
　ひけとかひなきこゝろつよさは

184（谷残花）さきてとくちる山さくらしたふ世に
　谷のひかりとにほふ花かな　雅親

185（暮春鐘）かへり行鳥のこゑにもうちそへて
　いりあひつらき春のくれかな

186（寄弓恋）としをふるこゝろつよさにたえもせて
　あつさのゆつるかけて恋つゝ

瞿麦　鵜河　門杉　寛正六五十三

187さま〳〵にからのやまとのうへませて
　ませゆひわたす庭のなてしこ

188しるやいかにこふねとませ[る]かゝり火の
　影たにあらしのち世のやみ

189世中をいとふしるしやとふ人も
　またて月日をすきたつる門　雅親

『16ウ

190 (罌麦)みれは又おきゐてともにすゝしきや
　ねての朝けのとこなつの露　雅親
191 (鵜河)小舟さしさはく鵜飼の衣手の
　しるまのかちもわかぬ色かな
192 (門杉)たか門そ人もかよはぬみちふかみ
　杉の葉したる五月雨のころ
　　冬煙　冬江　冬車　寛正二 十二 十三
193 富士のねのおもかけそたつうす煙
　雪よりなひく峰のすみかま
194 冬ふかきみきはのあしはかれはてゝ
　みなといり江の舟もさはらす
195 月日のみめくるもはやき小車の
　わつかにのこるとしの暮かな　＊232ト重複
196 (冬煙)ひねもすにけふりをたえぬかたやこれ
　すみやくならし小野の山里　雅親
197 (冬江)浪こほるいり江のあしのわつかなる
　枯葉をとしてうら風そふく
198 (冬車)つみそふるましはかうへの雪たかみ
　ちから車もたへしとそみる

』17ウ

　竹不改色　長禄四 十 廿六
199 いやつきにおひそふ竹のふかみとり
　かわらぬ色そ千世もかきらし
200 千世のいろかはらぬかけをたつぬれは
　こゝにみきりの竹の行末　雅親
　　鹿声何方　浦辺見月　樵路夕雨　寛正三 八 十三
201 さたかにはそこともわかす霧まよふ
　とをき尾上のしかのひとこゑ
202 雪はれて影もさやかにみくま野や
　うらよりをちのふくるよの月
203 風あらく雨ふりきほふ夕暮に
　かへさやいそくたにのしは人
204 (鹿声何方)いつれまてしかなくならし妻こひの
　声にこたふる山のやまひこ　雅親
205 (浦辺見月)月すめはよひ〳〵とひてなかめつゝ
　いく田のうみの浪のちさと[も]
206 (樵路夕雨)柴人のあしたにいりしみねの雲
　雨となりてもかへる暮かな
　　卯花初開　郭公未遍　被書恨恋　長禄四 二 十九 (四カ)

』18オ

207木のまもる月かとみるや卯の花の
　かつさく庭のかきねなるらん
208われになとつれなかるらん郭公
　き丶つとかたる人もある世に
209なをさりにかく玉章の中〳〵に
　うらみかすそふ人のことのは
210きえかての雪のかきねやさきそめて（卯花初開）
　友まつほとの庭の卯花　雅親
211初音きく人やまれなるほと丶きす（郭公未遇）
　里をはよそにゆくすゑの空
212はかなさのかすかきそふる玉章に（被書恨恋）
　おもはぬ人をうらみてそなく
　浜余寒草　水辺柳　祈逢恋　寛正三　二　十三

＊コノ会、四月興行ヵ

『18ウ

213さきてとくちらぬは雪の花なれや
　春もよそなる谷の木すゑに
214よるなみのあらふとそみる河風に
　なひく柳のかみなひのきし
215あふ瀬さへ袖ほしわひぬ貴舟川
　うきとし波にしほれこし身を
216春くるもしられぬ浜の松の戸を（浜余寒）
　たゝく嵐のまたきはけしさ　雅親
217にほとりのあしのいとなく糸たれて（水辺柳）
　玉もにましるいけの青柳
218いのりこしるしあらはす神かけて（祈逢恋）
　ゆくすゑをさへこよひちきれる
　未忘春花　郭公一声　寄名所恋　寛正四　六　十三

『19オ

219わすれては青葉にかせをいとふ哉
　花にうかりしこゝろならひに
220明ほの丶雲のほかにそきこゆなり
　さたかにもあらぬ山ほと丶きす
221したはまていろにや見えん山の名の
　もるやたもとの露も時雨も
222先さくもさきをくれしもうすくこき（未忘春花）
　桜におもふ夏木たちかな　雅親
223ほと丶きすわかいつはりにしたふそよ（郭公一声）
　たゝ一こゑとまちし名残を
224いかなれはまたこえやらぬあふさかに（寄名所恋）

『19ウ

せきのを川の袖ぬらすらん

更衣惜春　民戸早苗　相互忍恋　寛正二四十三

225たちかふる袖のわかれよ木すゑには
春にをくるゝ花もこそあれ

226ひまをなみとるやさなへにみえてけり
にきほふ民の秋の気色も

227いかにせん袖のなみたのもろともに
せくもかひなくいろにいてなは

228花の色に染しま袖はうつれとも（更衣惜春）
こゝろをかへぬ夏ころもかな　雅親

229あさいての門田よりまつとりそめて（民戸早苗）
さなへにのこる水そはるけき

230思ひをはわれもしのふのうら舟の（相互忍恋）
うき名あやうく人もなけゝと

池半凍　冬車　荻

231水のおもにへたてはあらしこほらぬを
こほるもおなし広沢の池

232月日のみめくるもはやき小車の
はつかにのこるとしのくれかな　＊195ト重複

』20オ

233秋風の吹しく程はをともせて
よはれはそよく庭の荻原

衾

234ねやのうへに降そふ霜やあつふすま
かさねても猶さゆる夜半哉　＊他出：文明二年一字題百首49

桜

235しら雲のまなくそかゝるしもといふ　』20ウ
かつらき山は花さかりかも　＊他出：文明二年一字題百首6

沢若菜

236うすこほりくたきてつまん下もえの
わかなみえすく野辺の沢水　＊他出：文明十七年百首5

関月

237あふさかやの関のわら屋は跡ふりて
半の月そ空にのこれる　＊他出：文明四年百首47

鶯

238たにかけや朽木をつたふ鶯も
春はこゝろの花になくらし

馴恋

239うとからぬ中にしも猶またるゝや

人まをおもふちきりなるらん

山霞左之三首御懐紙由、李阿申候了、

240はつれけりたつやころものいとか山
かすみみたるゝ嶺の春風

待花

241さらに又さきなは花におしむへき

春の日かすをいそくころ哉

祝言

242しきしまや道のちまたのちりをつく
山とことの葉いくよつも覧

同題

（日野富子）上様

243そのかみの代々にかはらて久かたの
あまのかく山霞きぬらし

（山霞）同

244うつしうへて軒はにまたぬ春たにも
花にこゝろをつくしやはせぬ

（待花）同

245かきりなく千代をかさねていくかへり

（祝言）同

』21オ

花もさくへき松のことのは

嶺雪　＊コノ歌以降義政詠カ

246玉たれをまきのとほその明ほのに
なかめにけりなみねのしら雪

千鳥

247よひかはすとものうら風寒からし
むろの木かけに千とり恋いなく

絶恋

248ともすれは又立かへりしたふかな
わすらるゝ身を我もわすれん

竹契齢

249はかりなき千いろの竹のふかみとり
おひ行末の春そ久しき

忍恋　大裏上臈（三条冬子）

250きえぬとも誰ゆへとたにしられしな
つゐにしのふの山のした露

待時鳥　藤大納言殿（日野勝光）

251色見えて五月待まのほとゝきす
人のこゝろの花にやとかれ

』22オ

野霜　雅親

252あさな〳〵おはなにましる霜の花の
いろにや秋の野辺をこふらん　雅親（ママ）

冬月

253すさまし き影をいとは、夜もすから
こゝろあさくや月にみえまし

眺望

254みるめなき海ともいはしさゝなみや
うち出てむかふおきつしまやま

（以下、本文ナシ）

『22ウ

（翻刻終）

○附記

貴重な資料の利用を許可された前田育徳会尊経閣文庫に深謝申し上げる。また、紙背文書の判読には末柄豊氏に多くご教示を賜った。記して謝意を表したい。

《初句索引》

あかすみて 111
あきかせの 233
あくるよの
　ときをたかへぬ 165
　よるのさかひに 168
あけほのの 220
あさいての 229
あさなあさな 252
あつきひの 21
あつまのに 104
あふさかの 237
あふせさへ 215
あふまての 92
あまつそら 53
あめのしたの 150
いかなりし 156
いかなれは 224
いかにせむ 227
いくちよそ 60
いくはるも 149
いけのおもに 62
いささらは 114
いたつらに 22
いつくにか 88
いつのまに 79
いつれまて 204
いととなほ 3
いにしへの 163
いのりこし 218
いひしらぬ 134
いまもたた 6
いやつきに 199
いろそそふ 48
いろみえて 251
うすこほり 236
うちつけの 31
うちなひき 82
　いまはたのまむ 80
　かほるもすすし 75
うつしうえて 244
うとからぬ 239
えしのたく 121
えにしある 110
おきまよふ 94
おくしもや 36
おくしもを 87
おほつかな 108
おもかけの 174
おもひいて 77
おもひのみ 71
おもひをは 230
かきりなく 245
かくとたに 183
かしこしな 37
かすかなり 202
かすならぬ 142
かすめたた 138
かせあらく 203
かせしほる 160
かへにふす 51
かへりゆく 185
かやりたく 100
かやりたくか 103
からひとも 148
きえかての 210
きえぬとも 250
ききてなほ 99
きくもうし 182
くさきまて 136
くちはてむ 107
くめちには 52
くものころ 137
くもはれて
　かけもさやかに

つきはひかりを 117
くもりなき 154
くもりなく 135
くらきよに 47
くれそむる 95
くれたけの 139
くれゆくや 147
くれゆけと 167
けさそなほ 27
けふいくか 105
こころありて 46
こすなみの 66
このまもる 207
こひしなは 153
これそこの 40
これやこの 124
こをおもふ 112
さきてとく 213
ちらぬはゆきの

ちるやまざくら 184
さくはなの 29
さくらしも 67
さたかには 201
さはるしも 16
さはるとも 34
さほひめの 144
さまざまに 187
さやけさは 11
さゆるよも 132
さらてたに 172
さらにいま 1
さらにまた 241
しかのやまの 98
しきしまの 131
しきしまや 242
しくれには 84
したくくる 178
したはまて 221

しつかにも 116
しはひとの 206
しひてなほ 74
しらくもの 235
しるやいかに 188
すさましき 253
すみわひて 58
せきのとも 44
そことなく 177
そてのいろも 68
そてむかふ 96
そのかみの 243
たえたえに 54
たかかとそ 192
たかやとも 179
たかよより 50
たちかふる 225
たつとみし 45
たつはゆき 42

たつみつの 12
たなはたの 57
たにかけや 238
たのめつる 159
たひにして 122
たまたれを 246
たまつはき 56
たよりにや 17
たれかけふ 70
たをるとも 143
ちきりしを 28
ちきるそよ 41
ちよのいろ 200
ちよまての 164
ちよをくむ 155
つきかけの
さやのなかやま 119
やとるかはせに 175
つきすめは 205

つきひのみ 195・232
つきもみぬ 127
つつむそよ 19
つまきこる 158
つましたふ 91
つみそふる 198
つゆふかみ 97
ところから 118
としつきを 171
としをおくり 176
としをふる 186
とちはてぬ 129
とはぬよは 4
ともすれは 248
なかしてふ 55
なきなのみ 145
なけやなほ 102
なつころも 93
なつふかき 152

なのみして 35
なほさりに 209
なみこほる 197
なみたかき 72
なれもこは 109
にほとりの 217
にほのうみの 14
ぬしやたれ 83
ぬれてをりし 2
ねさめして 39
ねやのうへに 234
ねをそなく 13
のとかなる 32
はかなさの 212
はかりなき 249
はきのうへの 85
はつねきく 211
はつれけり 240
はなのいろに 228

はるあきも 73
はるあさき 30
はるくるも 216
はるのいろ 61
はるのくる 33
はるふかき
すゑののかすみ 115
たにのこかけの 181
ひとかたに 25
ひとしれす 59
ひととはぬ 65
ひとなくて 113
ひねもすに 196
ひまもなく 10
ひまをなみ 226
ふくかせに 169
ふしのねの 193
ふゆふかき 194
ふりくらす 130

ふりそめて 133
ふりつもる 64
ふるゆきに 15
ふるよりも 157
ほとときす 223
まかきそと 20
ましはとる 140
またきなく 26
またきより 43
まつかさき 126
まつさくも 222
みかくれて 166
みしあきの 5
みつのおもに 231
みにそしむ 120
みやきのや 90
みやこより 161
みるめなき 254
みれはまた 190

むすふてに　9
むらさめの　151
むらしくれ　24
めにちかく　180
もとあらの　18
もらさしと　162
やすくぬる　101
やへかすみ　141
やまかせに　8
やまかはや　63
やまちなる　86
やまのはに　81
ゆくすゑの　89
ゆくひとも　38
ゆふたちの　
そらになるかみは　76
なこりのつゆを　69
よのなかを　189
よひかはす　247
よやさむき　23
よるなみの　214
よるのきりの　106
わかかたに　146
わかきみの　49
わすれては　
あをはにかせを　219
ふゆかとそおもふ　123
わたしふね　125
わたなへに　128
わたのはら　7
われになと　208
をとめこか　173
をふねこく　78
をふねさし　191
をやむまの　170